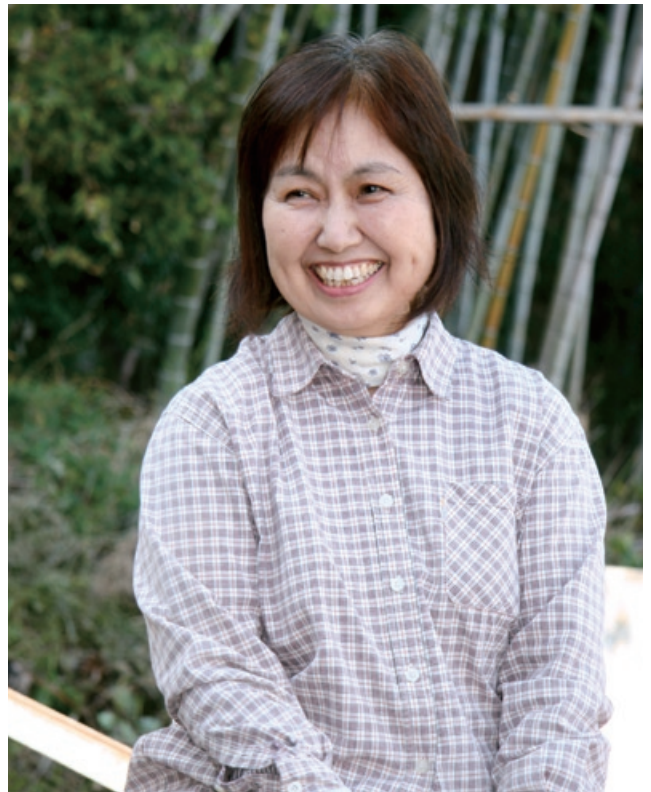


(財)オイスカ愛媛県支局副会長

筒井 静子 さん (上野)



11月7日、澄みわたった秋空の下、森地区の竹林にチェーンソーのエンジン音が鳴り響く。
そこには、ヘルメットをかぶり、チェーンソーやノコギリを片手に作業をする方々。竹が生い茂り、真っ暗な竹林のなかで、太ももぐらいある大きな竹を次々に伐採。伐採した竹を専用の機械で細かくチップにし、肥料にする。
額に汗を流しながらこの作業をしていたのは、(財)オイスカ愛媛県支局の筒井静子さん、この活動に賛同するボランティアの皆さんです。
(財)オイスカは、アジアの20か国で、人材育成や環境保護などを行ってお



▲11月7日、森地区の竹林整備に参加したボランティアの皆さん

り、また、愛媛県支局では、オイスカの森事業などといった森林保護活動に力を入れています。
現在、筒井さんは、さまざまなボランティア活動に取り組んでいます。「会社勤めをしていたとき、オイスカの活動を知る機会がありました。子どもころから父とよく山歩きをしていて、森が大好きだったので、アジアの国々の緑化に努力しているオイスカを支援することにしました。その後、退職をきっかけに身近な場所での自分の身体を動かして森づくりをしたいと思い、活動を始めました。」
森づくりの活動として、石手川ダムの水源かん養林や上三谷のえひめ

森林公園などで植栽をしたり、子どもたちが木に親しむ活動として、栄養寺(灘町)での森のつみ木広場などを開催したりと、積極的に活動する一方、山々を見ながら筒井さんはいつも気になることがあります。
「二見すると、緑に覆われた自然豊かな山に見えますが、よく観察すると、山のあちらこちらに竹林があると、山に気付きました。調べてみると、竹林は成長がはやく、管理をしないとすぐに密集し、周りの山に広がっていくそうです。これを何とかしないとほと思ひ、竹林整備をオイスカ愛媛の事業の一つにしました。他のボランティア活動で知り合った方たちにも応援していただいています。」
放置竹林とは、管理者の高齢化や輸入タケノコによる価格の低迷などが原因で管理しなくなった竹林のことで、年々その面積を広げており、現在、全国各地で問題となっています。
「植樹活動などは、関心が高く高校生などたくさんの方が集まりますが、竹林の整備活動は、あまり人が集まらないのが現状です。かといってこのまま放っておくと、竹ばかりの山になってしまいます。だから、だれかがやらないと…」
こう話していた筒井さんに、これからの目標を伺うと、「四国といえはお遍路さんです。四国の山々にある遍路道をきれいにしたいなあ。」と優しい笑顔で答えていただきました。